忘れ得ぬ人々
――その２　The Three Princetonians――

辻　成史

折に触れ自分の人生を振り返るとき、一方で忘れてしまっていることの多いのに驚くとともに、他方では、何年たっても忘れられない日の記憶のあるのに気付く。必ずしも良いことばかりではなかろう。誰にでも辛かった日の思い出はあるが、楽しかった、幸せだった日の思い出も無いわけではなかろう。私はイングマール・ベルイマンの作品が好きだが、『叫びと囁き』の最後の場面はひとしおである。生前は病苦と孤独に苦しみ、死後もなお叫び続けた主人公は、忠実な女中に一冊の日記を残す。女中は夜半に目覚め、蠟燭の光でその頁を繰ると、そこに、主人公がまだ戸外に出る元気のあったころの、ある日の幸せの思い出が綴られていた。ベルイマンの映画は辛く、苦しい内容のものも多いが、しばしばその辛苦を償うように、物語の最後が幸せな一刻の思い出やヴィジョンで終わっているものがある。

私は自分で、それほど不幸な環境に育ったと思ってはいない。むしろ人に話せば羨まれるような環境であったと思っている。しかし私の幼・少年期はとにかく病気続きであった。とくに十代に入ってからは、まず空襲の余波で危うく一命を落とすほどの大怪我をした。戦後は、当時多くの日本人が犠牲となった肺結核で、大学受験前後の二、三年は、大手術を挟んで大半を床の中で過ごした。戦後、栄養を取ることもままならぬ時代に、両親、兄弟や姉にも多大な苦労をかけた。それらから何とか立ち直り、人並みに学校に通えるようになったのは二十歳を過ぎてからである。高校の同級生たちが次々と社会に出て一人前になってゆくのを横目で見ながら、私は一人焦っていた。何とか自分の失われた十代の日々を取り戻したいと、誰が見ても無茶な暮らし方に走った。

しかしこの間、精神的・感情的に紆余曲折しながら、私は自分の進む道は研究者しかないと思うようになってきた。もちろん美術は好きであったが、他方外国語は、家庭の影響もあって中学時代から得意であったから、どうせ研究者になるなら西洋美術史をやろうと決意したのは学部に上がる頃であった。大学院に進み、前回思い出を書かせていただいたローズ先生や三浦アンナ先生の薫陶を得て、キリストの生涯の物語図像を専攻しようと決意した折に、これも先回記したとおり、K・ワイッツマンの研究に大いに鼓吹され、著者に何度か直接手紙を書いた。アンナ先生からもご推薦をいただいたと記憶している。今思えば恥ずかしくて穴あらば入りたいような貧しい勉強態勢であったが、幸いワイッツマンの好意を得て、プリンストンの大学院で学ぶこととなった。

世間に衒っていう訳ではないが、その時点で私は、プリンストン大学で学ぶということがどんな特権であるかはよく認識していなかった。嬉しかったのは、とにかく自分の選んだ勉強のテー

マに関して第一人者である先生に師事できるということ、日本では当時まだ乏しかった初期キリスト教やビザンティン美術関連の文献を、誰に遠慮することなく利用できることなどが、何にも勝る特権に思えた。そして、国家主義教育で育てられた当時の日本人の青年として、（小澤征爾のように日の丸の鉢巻きこそしなかったが）どうせ海外で学ぶのなら、ただ最新の学問的状況を日本に紹介するばかりでなく、自分も海外の研究者に伍して、一人前の研究者として遇してもらえるようになろう、と決意していた。

今でこそ海外の大学で西洋美術史の博士号を取得する人の数は多いが、私の学生時代教えていただいた先生の中では山田智三郎先生、吉川逸治先生のお二人だけであり、私がプリンストンに出かけるのと丁度入れ違いぐらいで、辻佐保子さんがパリで博士号を取得して帰国された。それが戦後の西洋美術史の、最初の海外での博士号取得であったように思う。留学に出かけられる前、東大の研究室でちらりとお見かけした院生時代の佐保子さんは、いかにも年頃のお嬢様らしく、可愛い方という印象であったが、帰国後間もなくお目にかかった佐保子さんは、かなり窶れていらして、絶えず煙草に火を付けられるお姿に、ああ、随分苦労されたのだな、と胸の痛む思いだった。

幸いプリンストン大の奨学金を与えられ、旅費もフルブライト奨学金の補助をもらい、一ドル360円の時代としてはあまり金銭的な心配をせずに現地に向かうことが出来た。アメリカに到着して最初に驚き呆れ、思ったのは、なぜ日本は、こんな巨大な生産力をもったアメリカに戦争を挑んだのか、ということであった。当時日本を出発するころには、やっと東名高速が神奈川県まで開通し、高速運転に慣れないドライヴァーが次々と事故を起こしていた。それに比べ、アメリカでは、片側三車線の高速道路が至る所に通じていた。日本でバスといえば、市中の乗り合いバスがせいぜい時速30～40キロで走っていただけのその頃、アメリカではバスまでが時速100キロ以上で高速道路を走っていた。

あれは1962年の9月の10日頃であったように思う。プリンストンに着いた日は秋晴れの快晴の日であった。荷物が多かったので、大学院生寮まではタクシーで行ったが、荷を解くとすぐに本部と学部まで、到着を知らせるために寮を出て歩き出した。限りなく美しい、静かな日であった。寮の前には緩やかに起伏するゴルフコースが広がり、柵もなく、芝生を横切るものを遮る人もなかった。迷って道を尋ねた人の家では、アフリカン・アメリカンの老庭師が、リンゴの木に実った秋の実を棒でたたいて落としていた。学期開始前の町には人影も少なく、ただ燦々と秋の陽光が緑の上に注いでいた。私は自分の再生を感じていた。

今回の稿で、思い出に残る三人のアメリカ人の先生方 —— レンスラー・リー[1]、ミラード・ミー

[1] 主著 Rensselaer W. Lee, "'Ut Pictura Poesis': the humanistic theory of painting," *Art Bulletin* 22-4 (1940), pp.197-269（森田義之、篠塚二三男訳。中森義宗編『絵画と文学— 絵は詩のごとく』中央大学出版部、1984年収録）.

ス[2]、そしてポール・アンダーウッド[3]―― のことを書くためにその方々の学歴その他を調べ、今更のように知ったのは、三人が三人ともプリンストン大の出身者であったこと、そして三人とも入学のときは美術史学専攻ではなかったことであった。リー先生は英文学科の卒業、他のお二人は建築科の卒業であった。三人の中ではリー先生が一番年長で 1898 年生まれ、次がアンダーウッド先生で 1902 年、一番若いミース先生は 1904 年の生まれである。ただし歿年の順はこれと反対で、ミース先生がもっとも早く、リー先生は享年八十六歳のご長命であった。

この中で、私が直接教えていただいたのはリー先生だけである。ミース先生は、大学に隣接してはいるが、別機関の高等学術研究所の教授であり、大学では一度も教鞭をとられたことはなかった。しかし、当時学部図書館内に設けられていた研究所所員のための研究室にはしょっちゅう見えられていた。アンダーウッド先生に至っては、私が大学院の単位を取得した後、足掛け三年ほどお世話になったハーヴァード大学委託管理のダンバートン・オークス・ビザンティン研究所で初めてお目にかかり、しばらくご教示頂いた先生である。

それにもかかわらず、なぜプリンストンで出会った他の先生方の思い出を語る前に、この三人の先生方について記すのか、と訝られる方もあろう。よく考えてみると、自分でも何故こういう選択になったのか、まして、より多くの読者が期待してくださっているパノフスキーやワイッツマンの想い出を措いて、まずこれらの先生方について語ることになったのか、よく分からない。しかし振り返ってみれば理由は簡単である。それは、これらの先生方が、三人ながらあの時代のアメリカに生まれ育ち、教育を受けた優れた研究者であると同時に、何時お目にかかっても心温まる様で私を迎えてくださった gentlemen であったからである。

ある時から私は、自分勝手に gentleman を心の中で定義している。gentleman の第一の条件は、まず礼儀正しいこと。第二に、たとえ相手がどんな人であれ、その人を傷つけるようなことを口にしないことである。まして人に向かって声を荒げたりすることは論外である。第三の条件とは、心の中に自分の信条をしっかりと保っていることである。実はこの三つのことを同時に実現するのは難しい。自分の信条を人に受け入れさせようとすると、とかく人を傷つけるようなことになる。大事に心の中にしまっておくのが良い、と思いながらも、ついついそれを喧しく口にしたり、鬼面人を驚かせる行動に出たりする。

私は自分では gentleman になれない人間である。だからこそここに挙げた三人の先生方については、先生方の赫々たる学問上のご業績は勿論のこととして、その裏付けとなっている先生方の学問や世間に対する心遣いに強く惹かれるのである。リー先生は、到着したばかりの私が最初

---

[2] 主著 Millard Meiss, *Painting in Florence and Siena: after the Black Death*, Princeton 1951（中森義宗訳『ペスト後のイタリア絵画—14 世紀中頃のフィレンツェとシエナの芸術・宗教・社会』中央大学出版部、1978 年）; *French Painting in the Time of Jean de Berry*, 5 vols., London/ New York 1968-74; *The Painter's Choice: problems in the interpretation of Renaissance art*, New York 1976.

[3] 主著 Paul A. Underwood, "The Fountain of Life in Manuscripts of the Gospels," *Dumbarton Oaks Papers* 5 (1950), pp.41-138; *The Kariye Djami* (ed.), 4 vols., New York 1966-75.

にお目にかかった先生である。当時アメリカの美術史学について本当に無知であった私は、まだ先生のお名前を聞いたこともなく、“Ut pictura poesis” という名論文のあることも知らなかった。人の所為にするわけではないが、1960 年前後には、日本の研究者の間では、未だアメリカにおける美術史の研究状況は、ほとんど知られていなかった。出発前にアメリカ留学に言及すると、なぜ美術史をやるのにアメリカに行くのか、と懐疑的な意見を漏らされる先輩方も多かった。

Fragonard, *Le chiffre d'amour*, Wallace Collection, London

Cf. R. W. Lee, *Names on Trees: Ariosto into art*, (Princeton, 1977)

プリンストンでの二年目には、リー先生のワットーに関するゼミを取らせていただいた。多分そこでは、ワットーばかりでなく、同時代のイタリア絵画、例えばティエポロなどについてもいろいろ触れられたと思うし、タッソー、アリオストなど、近世イタリアの詩人の名に馴染んだのも、先生のゼミのお蔭であったのかも知れぬ。十八世紀美術について全くの素人であった私も、ルイ十五世時代の王のセーヌ河降りの舟遊びをテーマに拙い発表をさせていただいた。リー先生は、門外漢の発表も快く、嫌な顔一つされずに聴いてくださった。ニューヨークに行くたびに訪れていたフリック・コレクションでは、ジョヴァンニ・ベッリーニの「(頌歌を歌う) 荒野の聖フランチェスコ」などと並んで、フラゴナールがマダム・デュ・バリーのために描いた壮麗な「愛の行程」が、いつの間にか私のお気に入りになっていた。ゼミのたびに、リー先生は、「ワットーはモーツァルトだね」と繰り返し言っておられたが、当時まだ「フィガロの結婚」などに盛られたモーツァルトの人間観をよく理解していなかった私は、ただ何となく先生のカジュアルなご感想と思って聞き流してしまった。もっといろいろ教えていただくことがあったのに、と今更のように思う。

リー先生から受けた学恩の数々は言うまでもないが、あれから六十年以上たった今、思い出に

一番鮮やかに残っているのは、ある日の午後の路上の光景である。その日も明るい秋の午後だったように思う。というのは、それは私が初めて先生にお会いしてから、未だあまり日が経っていなかった時、と記憶しているからである。到着したその日には、道を間違え、静かな緑の小道をあちこちと歩いているうちに、私は大学からそう遠くないマーカンド・パークという小さな公園を抜けたことがある。その日も私は、青々とした芝生の上に木々が影を落とす公園を抜けて、かつてアインシュタインが住んでいた家のあたりを歩いていた。通りには車も、行き交う人の影も少なかったが、私は、反対方向のキャンパスの方から、長身のリー先生が一人で歩いてこられるのに出会った。先生はいつものようにきちんと、明るい色の三つ揃いの背広を召しておられた。（当時は大学院のゼミでも、教師、学生ともにネクタイの着用が不文律であった。）私を認められると先生は、ちょっと立ち止まられ、微笑しながら握手の手を差し伸べられた。そのとき先生からかけられた言葉は、多分「Tsuji, 元気でいますか？」といった程度の日常的な挨拶だったように思う。それだけのことであった。しかし今となっても、その日の先生との、一分にも満たない出会いの思い出が、鮮やかに戻ってくるのはなぜであろうか？ 初めての到着の日と同様、町は緑に埋めつくされ、人影もない街路にはただ秋の日だけが燦々と降り注いでいた（と私は信じているのである）。

三人の先生方の中で、ミース先生だけは 1950 年代、日本を来訪されていた。戦後アメリカは、とくにヨーロッパの文化財が戦禍によってどのくらい失われたか、毀損されたか、またその修復の手段をどうすべきかについて、様々な形で調査団を送り、それが戦後のアメリカと欧州の美術史学の交流の大きなきっかけになった。ミース先生は、多分国際美術史学会を代表し、戦後日本の文化財保全や、研究者との交流のために来日されたのだと思う。確か私が留学から帰国した後のことだったと思うが、東京藝大で大変にお世話になった摩寿意善郎先生から、その折のお話を少しだけ伺ったことがある。摩寿意先生がミース先生に会われたのは、先生が、戦前から海外で名を知られていた矢代幸雄先生のお弟子であり、戦後日本におけるイタリア美術研究を代表していられてのことであったろうと思う。その摩寿意先生が当時を述懐されて、「いや、ミースさんのイタリア語のうまいのには驚きました」と言われていたのが今も記憶に残る。今となれば、ミース先生ぐらいのイタリア美術の研究者であれば、アメリカ人であろうがドイツ人であろうが、イタリア語に流暢であることは至極当然と思うのであるが、戦後の日本の美術史学界では、アメリカ人研究者の力量はほとんど知られていなかった。

他方ミース先生は、短時日訪問された日本について、大変良い印象を持っておられ、それもあって私に声をかけて来て下さったのかもしれない。一度ならず招いていただいたお宅には、日本で求められた屏風を始め日本の工芸品などが、趣味良くお部屋を飾っていた。

（次号に続く）